

1927年5月26日

ちょうど水平線から朝日が昇るとき
岩村昇は生まれた

岩村昇物語

— 草の根の人たちとともに生きる —



原作 Lattice編集部
画 三枝義浩

岩村は母のシヅがキリスト教教会の
会員だったこともあり
小さなころからキリストの教えに
触れて育った



岩村は幼少期に2度
大きな病気をしている



1度目は幼稚園の頃
父親と行った屋台で
スイカを食べた後
疫痢にかかって
昏睡状態に陥り

2度目は肺門リンパ腺
結核にかかる

この体験が幼心に
医師の志の種をまいた



1945年8月6日の朝
いつものように
学校へ行った岩村を



1944年に
広島高等工業高校
(現在の広島大学工学部)
に入学



突如ピカッと閃光が襲い
同時にドンッという音が
鳴り響いた

『広島原子爆弾投下』



約14万人が亡くなる
大被害の中



岩村は当時救護活動をしていた
水兵に助けられ
医者と看護師等の懸命な処置の末
一命を取り留めた



1947年に旧制松山高等学校
(現在の愛媛大学文理学部)の
理科に編入学



岩村が元気を取り戻し
勉学に戻ることが出来た一方



自身を助けてくれた水兵は
強い残留放射能の中で
救護活動を続けた影響で
次々と亡くなっていった

この体験から
将来医者になって
人の命を助けたいと
思うようになる



1950年米子医科大学
(現在の鳥取大学医学部)に進学



1954年3月21日
午前中に大学の卒業式



午後に門脇史子と
結婚式を挙げた

お祝い金にめんど
なにか誓いの言葉を述べよ



お互いに困っている人
とりのこされている人のためになろう



われわれ2人は今日から とりのこされた人びととともに
とり残された問題ととりくみます 以上とりとりの誓い!



ネパールでは今
公衆衛生に詳しい医師を
求めています

日本キリスト者医科連盟総会



1959年『日本キリスト者医科連盟』の総会で
聖路加国際病院の日野原重明先生から
ネパールに関する報告があった

ネパールに行くのも
信仰の道でしょう

この言葉に大きく心を動かされ
妻史子の後押しもあり
ネパール行きを決意する



初めは賛同してくれる
人はいなかった

だが岩村の決意が
固いことを知ると
徐々に賛同してくれる
人が増えていった

1962年
『日本キリスト教海外医療協力会
(JOCS)の派遣ワーカー』として
夫婦でネパールへ向かった

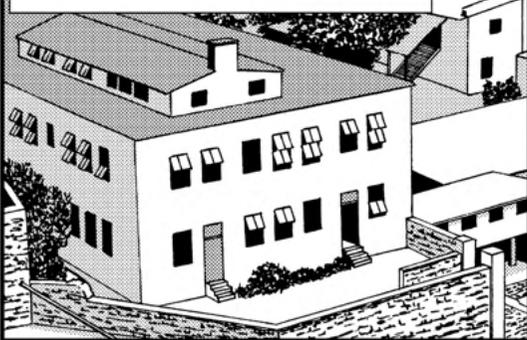


この時岩村34歳
史子33歳

1962年 キリスト教団体
『ネパール合同ミッション』が建てた
シャンタバワン病院に入り
4か月もの間ネパール語の勉強に没頭



その後 公衆衛生の専門医として
タンセン病院に赴任した



ある日
赤ん坊を連れた
母親がやってきた

先生……



大丈夫ですか!?

待っているだけでは
手遅れの患者を
増やすばかりだ

母親は重度の肺結核にかかっていて
病院に着いた途端に倒れてしまい
3か月後に亡くなった



こうして
巡回診療が始まった



岩村が巡回診療で
止まったある山村に
1人の重症の
おばあさんがいた



入院の必要があり
運ぶのに困っているとき



たまたま通りかかった青年が
その運搬を引き受けてくれた

運搬後
岩村はその青年に対して
謝礼を支払おうとした



しかし青年は
受け取らなかった



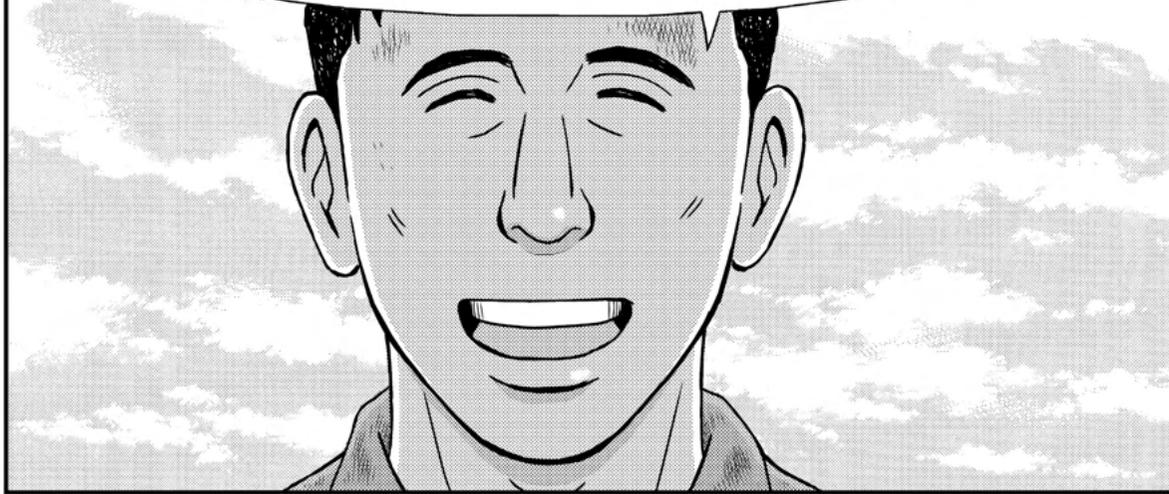
ドクター
俺は確かに貧乏だ

だけど金のために
おばあさんを
運んだんじゃない

では
なぜ...?



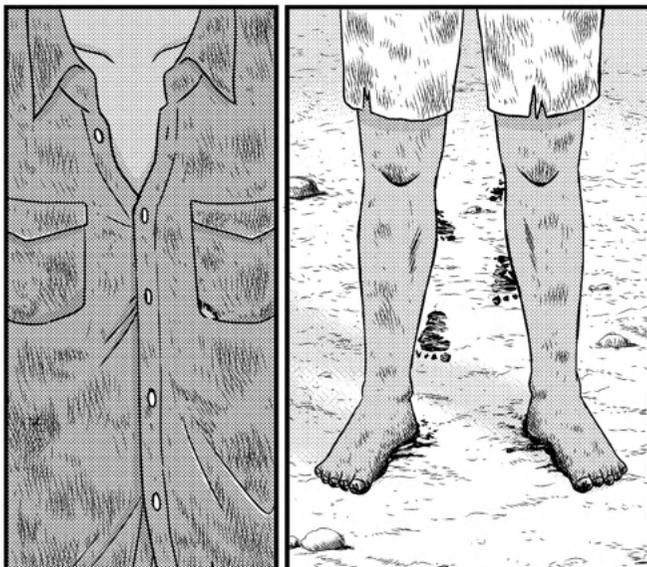
サンガイ・ジウナコ・ラギ
(みんなで一緒に生きるためだ)



俺は若くて健康だ
このおばあさんは
年を取っているし
しかも病気だ



そんな人にこの
余っている体力を
ほんの3日間
おすそ分けした
だけだよ



この
『サンガイ・ジウナコ・ラギ』は
現在 JOCS 会報
『みんなで生きる』の
もとになっている

1968年頃
岩村はいつものように
巡回診療をしていた時
1人の日本人青年と出会った



この青年の名は
『稲村昭南』

稲村はしばらく岩村の助手として
巡回診療に同伴し
伝染病の予防や治療の手伝いをした



2人は共に行動していくうちに
『人の手の入っていない自然の中で
人間らしい人間の生き方を
体験することができる場を作りたい』
という共通の想いを抱くように
なっていた



この想いがもとになり
岩村の中で『アジア自然塾^{※1}』の
構想が始まった



アジアの人々とともに
生きていくことを望む稲村が
この塾の塾頭になることで
岩村の構想が現実のもの
となった

その他にも『使用済み切手運動^{※2}』で
35万本ものBCGや医療機器を送り…



『おかあちゃんホーム』と呼ばれる施設で
妻史子と共に多くの孤児を預かり…
ネパールの『草の根』の人々のために
奉仕してきた岩村



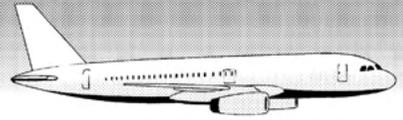
※1 夏は長野県木曾の開田高原で
テント合宿 冬と春にはネパールや
フィリピンを訪れ共同生活をしながら
現地の子ども達と一緒に植林活動をする

※2 『使用済み切手200枚でBCG1本』を
キャッチフレーズに小学生から
女性団体まで幅広い年齢層に
爆発的な反響を呼んだ



しかし原爆症の再発に加え
長年の激務により
1980年3月JOCSワーカーを
引退した

18年にも及ぶ
ネパールでの奉仕を終え
日本に帰国



1981年6月
PHD運動^{※3}を提唱

アジアおよび南太平洋地域の青年たちが
日本でホームステイをしながら
有機農業や保険衛生の技術や知識を学ぶ

研修事業は急速な近代化の
反省も踏まえつつ実施してきており
2014年度現在までに受け入れた
研修生は約300人にもものぼっている



Peace(平和)、Health(健康)、Human Development(人づくり)の頭文字をとって名づけられた草の根の人々による交換交流・協力の活動をしている団体です。
日本とアジア・南太平洋地域の草の根の人々との交流を通して平和と健康を担う人づくりをすすめ、共に生きる社会を目指します。



岩村は次にアジア自然塾の青年版
「国際人材開発機構 (IHI)」の
構想を始めた



『宇宙船地球号』の
乗組員の多くが貧困層



その現実に対して
何かできることはないかと
考えていた

※3 10%の時間とお金をささげて
「平和(Peace)と健康(Health)を
つくる人材をそだてよう
(Human Development)」という運動

そんな時
マザー・テレサと出会い
IHIの構想を後押しした



日本はとても豊かな国ですが
精神的には非常に貧しい



経済的に豊かになるだけでなく
心身共に健康であるだけでもない



それらが総合的に向上するような
村づくりをしていくリーダーの
育成が IHI の目的

その国 その場に生きる人々が
自分たちの健康と生活を自分たちで
作りあげていく手助けをする



IHI はまさに岩村の考えを
形にしたものだった

その後
岩村の活動は世界中から注目され
多くの国や団体から表彰された

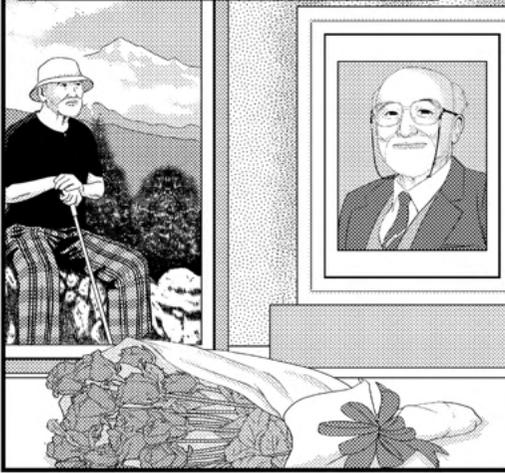


1973年 「吉川英治文化賞」

1981年 「国際ロータリー平和賞」
「アジア・アフリカ賞」

1993年には
アジアのノーベル賞ともいわれる
「マグサイサイ賞」を受賞した

「平和をつかっていくこと」
岩村は生涯をかけて
訴え続けた



自分の欲望を10%で
いいから我慢をして
周りの弱い立場の人と
分かち合う



日本とアジアの草の根の
人々との交流を通して
平和と健康を担う人材づくりは



現在そしてこれからも
続いていくことだろう